

勝井義雄先生のご逝去を悼む



日本火山学会名誉会員、北海道大学名誉教授、勝井義雄先生は平成27年10月20日、療養中の札幌市内の病院でご逝去されました。享年90（満89歳）でした。生前のご功績を偲び、ここに謹んで哀悼の意を捧げます。日本火山学会においては戦後、活動を再開した昭和31年当時からの会員で、その後長く委員・評議委員として、そして昭和55-57年には会長を務められ学会の発展に尽力されました。その間の、昭和56年に東京および箱根で開催されたIAVCEI総会を成功に導かれました。

勝井先生は大正15年北海道岩見沢市でお生まれになり、北海道大学理学部地質学鉱物学科を昭和25年3月にご卒業後、直ちに北海道大学理学部門教官に任ぜられ、助手、講師、助教授を経て、昭和47年12月理学部地質学鉱物学科教授に昇任されました。そして平成2年に同大学を定年退職され、引き続き同年4月から札幌学院大学教授となられ、平成11年3月に退職されるまで、後進の教育・指導と研究に携わりました。

先生は昭和24に北大時代の恩師である石川俊夫先生の指導の下、卒業論文のテーマとして雌阿寒岳の研究を始めてから、北海道の火山を中心に、火山地質および岩石学的研究に取り組みされてきました。先生は強靱な体力の持ち主であり、大学教員になってからは支笏降下軽石の分布主軸を求めて、あるいは北海道東部の広大な平原を摩周火山のテフラを求めて、バイクにまたがり広い北海道を走り廻ったそうです。さらに摩周カルデラ壁を藪こぎをしながら歩きまわり、噴火層序を確立するためにその壁面を湖畔まで何回も行き来したと伺いました。その後も多くの火山で成果を積み重ねられました。そのテ

フロクロノロジーを重視した火山地質学的研究は我々後進の手本であり、現在でも北海道の火山の研究を行う場合には、多くの火山で先生の文献がバイブルとなっています。一方で先生は、岩石学的研究においては高度な技術が必要な湿式分析も精力的に行い、北海道全域の第四紀火山岩組成の広域変化を初めて明らかにしました。その成果は、島弧マグマの成因論の進展に大きく貢献しました。1960年のチリ地震に連動したアンデスのプジェウエ火山の噴火後に、国立チリ大学に2度にわたり招聘され、通算2年半にわたり滞在し、アンデス山脈から南極に至る長大な地域の火山調査にも従事され、その活躍の場を広げられました。

先生の業績で特筆すべきことは、自らの火山研究の成果を火山災害の軽減に結びつけることで、研究の社会貢献の先導役を果たされてきた点です。昭和37年の十勝岳の噴火を経験して、先生は石川先生・横山泉先生と共に、火山防災対策としての火山研究の重要性を北海道防災会議で訴えました。北海道はそれを認め、受託研究「北海道における火山に関する研究」が開始されました。そして年次計画で活火山の研究を実施し、その報告書を昭和46年の十勝岳から昭和63年の倶多楽まで12編を出版しました。この報告書のユニークな点は、個々の火山の地質学・岩石学および地球物理学的研究の成果をまとめただけでなく、最後の章に「予想される噴火と防災上の留意点」として噴火予測・災害予測と防災対策の指針を示している点にあります。この受託研究の第一次計画で報告書を刊行した、十勝岳、樽前山、有珠山、北海道駒ヶ岳および雌阿寒岳では、昭和52年からの有珠山噴火以降、全ての火山で噴火が起きました。そして個々の噴火では刊行した火山研究報告書が観測と防災の両面で有効な指針となりました。しかしこの報告書はある意味で専門家向けであり、このままでは行政や住民の利用には不適であることを痛感していた先生は、同時に火山の地元の自治体と密接な関係を作り、昭和58年には北海道駒ヶ岳、そして昭和61～62年に十勝岳で地元自治体によるハザードマップの作成を指導されました。これらのマップは国が平成4年にハザードマップ作成指針を作るのに先駆けたものであります。これらの長きにわたる火山災害の軽減のための貢献は、先生の先見性とその行動力の賜物でありました。上記の受託研究「北海道の火山に関する研究」は現在まで続けられていますが、

我々は勝井先生らのように定期的に報告書出し続けることがいかに大変かを痛感しています。しかし平成26年に十勝岳の第二版を刊行することができ、先生にも見ていただくことができたのが、せめてもの恩返しであったと思います。

一方で、先生は昭和37年の十勝岳の噴火以降、昭和52年の有珠山や昭和63年からの十勝岳の噴火などでの噴火対応にも多大な貢献をされました。特に横山先生や岡田弘先生などの北大地球物理教室の先生方との、噴火の局面毎でのチームワークのとれた対応は、北大方式と呼ばれ多方面から賞賛されたと聞いています。これらの実績から気象庁の火山噴火予知連絡会に地質分野からはじめて委員として参画しました。このような研究・教育そして噴火対応という激務のため、十勝岳噴火活動中の平成元年には東京での会議後に倒れられ、入院・手術という大病を経験されました。しかし先生は見事に復帰され、平成12年の有珠山の噴火では大所高所から我々現役にアドバイスを下さりました。先生は、自らの火山研究成果を火山防災対策に長年にわたり還元してきたことが高く評価され、平成2年に北海道科学技術賞、平成3年には国土長官表彰（防災功績者）、平成10年北海道功労賞を受賞され、また平成19年には瑞宝中綬章を受章されました。

著者は平成元年4月に北大に勝井先生の研究室の助手として赴任し、たった1年間の短い間ですが先生と身近に接する機会を得ることができました。先生は退院後にもかかわらず、機会があるごとに支笏湖周辺や駒ヶ岳周辺の巡検に私を連れてゆき、私には馴染みの薄かったテフクロロジーについて教えていただきました。また

毎日の昼食もご一緒し、様々な話を伺うことができました。勝井先生は同年代の先生と比べても大柄な方で、その体で人を温かく包み込むような紳士であり、ユーモアにとんだ話しをされる方でした。ある日先生は真顔で「僕の地質調査は人より大変なんだ。それは人の倍の食料を持ってゆくからだ」とおっしゃり、その後に楽しそうに笑われていました。先生の周りに、多くの人が集まってきた理由の一端を見た気がしました。先生は平成11年に実施されたビザ無し専門家交流のひとつとして実施された国後島爺爺岳の日露共同調査団の団長を務められ、様々な団員を見事にまとめられました。著者も地質班のリーダーとして参加しました。先生は当初は山頂には行かないとの予定でしたが、現地に行くと予定を変更して山頂まで自ら登山をされました。70代での先生の体力に驚かされただけでなく、恩師である石川先生も調査された爺爺岳の山頂火口での、石川先生の思い出を語る先生の満足そうな顔が忘れられません。

先生は十勝岳の大正泥流が発生した大正15年のお生まれです。その泥流の流路には先生の誕生とともに白樺が芽吹きました。そして先生の活躍に合わせるように、見事な美しい白樺の一斉林として成長してきました。白樺の寿命は70年ほどだそうで、先生は白樺の一斉林が針葉樹などに世代交代する時が、自分の引き際だとよくおっしゃっていました。確かに白樺林から針葉樹林が引き継ぎつつあるようですが、我々後進も先生の後を間違わずに引き継げるように、心がけてゆくことを先生にお誓いしたいと思います。最後に、改めて先生のご厚意に深く感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

(中川光弘)